

**アフリカン・アントレプレナーのトランスナショナルな移動と社会的ネットワーク  
—ニューヨーク・ハーレムにおけるセネガル出身ムリッドを事例に—  
African Entrepreneurs' Transnational Migration and Social Networks  
A Case Study of Senegalese Mourides in New York**

**榎並ゆかり（同志社大学大学院）  
Yukari ENAMI (Graduate Student, Doshisha University)**

キーワード：トランスナショナリズム、国際移動、ムリッド、アントレプレナー、セネガル

## I 研究の目的・背景

ムリッド教団は、西アフリカ・セネガル発祥のスーフィー系ムスリム教団の一つである。95%がムスリムと言われるセネガルで、ムリッド教団は19世紀末、アフマド・バンバという一人のスーフィーの周りに形成された小集団から発展し、現在では第2勢力として現在も信徒数は増加しているという。

ムリッドは、今日、世界各地に移動し、移動先都市にコミュニティを形成しながら、モスク（宿泊施設、集会所を含む）を設置し、教団ネットワークの拡大に貢献している。ムリッド教徒は、移動先で主に本国との貿易関連の卸売・小売・仲介者、タクシーなど運輸関連職種に従事し、アントレプレナー（起業家）として、個人レベルでのビジネス・ネットワークを広げている。

報告者はムリッドの出身国セネガルと移動先各地を繋ぐネットワークの全体規模とその特質について研究している。これまでの調査研究では、出身国セネガル、移動先としての広州、ドバイ、ニューヨークで調査を行い、ネットワークのノード（結節点）としてダイラと呼ばれる信徒組織とムリッド・レストランの意義を実証してきた。また、先行研究からは、ムリッドのビジネス・ネットワークが移動先のフランス、イタリア、アメリカと強い繋がりがあることも明らかになっている。

本研究は、セネガル出身のムリッド（Mouride）を事例に、アフリカからアジアへのトランスナショナルな移動に注目し、参与観察によって故郷と移動先の両方の世界を同時に生きる彼らの生活世界を詳細に描写することによって、彼・彼女らの本国と移動先との間に構築された社会的ネットワークを明らかにしようとしている。

## II 調査概要

### 1 調査地・時期・方法

ニューヨーク州ニューヨーク市ハーレム 116 丁目~137 丁目（Harlem, W116-137）周辺地区

2014年1月~2月、10月~11月（計約3週間）

リトル・セネガルと呼ばれる一角での質的調査法（参与観察、教団関係者・商店主へのインタビュー）

### 2 ハーレム地区の概要

オランダ人が入植した17Cに現在のニューヨーク（ニューアムステルダム）が誕生し、1898年に現在のニューヨーク市が誕生した。当初、ハーレム地区にはヨーロッパ系白人が多く居住していたが、1900年代の地価暴落に伴い、アフリカ系移民がハーレム地区の代表的な存在となっていた。2000年代には、ハーレム・ルネサンスと呼ばれる再開発が進み、現在も進行中である。ハーレムは3地区に分けられ、場所によって全く違う景観と住民によって構成されており、実際に歩いてみると体感する雰囲気も聞こえてくる言語も全く違うことを実感する。セネガル系住民はセントラル・ハーレムの116丁目、125丁目、135丁目周辺で商業を中心に経済活動を展開し目立つ存在となっている。今回の報告では、この3カ所を中心に、調査者が得た詳細情報を報告する。

### 3 リトル・セネガル（116st West Harlem）におけるムリッドのプレゼンス

セネガル人経営の店舗やレストランが連なり、通りを歩くとウォロフ語（セネガル公用語）が聞こえてくる。店舗では、セネガル食材、日用雑貨、民族衣装等、本国から輸入された物資が売られている。この地区に、全米セネガル人会事務所がある。事務所を取り巻くように、ムリッド経営の商店が並んでいる。北側に少し行くと、138丁目にムリッド教団のアメリカ本部がある。マルコムX通りを少し西に行くと、観光客向けにアフリカ雑貨を扱う市場があるが、以前、路上で商売をしていたアフリカ出身者をニューヨ

ーク市が入居させ、治安回復を図ったことによる。この市場には現在 20 軒ほどが入居し、セネガル、マリ、ニジェール出身者が祖国の土産物を販売している。うち、3 軒ほどがムリッドの店舗であった。

#### 4 NY市の政策による125丁目からのアフリカ系屋台の撤去

現在のセントラル・ハーレムの最も大規模な商業地区は、125 丁目である。アポロ・シアターを中心に、目抜き通りには、H&M や GAP 等世界チェーンの大規模店舗が立ち並び、地元客をはじめ、外国人観光客も多く訪れる。かつて、この 125 丁目の路上は、まるでセネガルの首都ダカールの主要市場のような光景が見られ、セネガルをはじめアフリカ系の路上屋台が林立し、活気のある市場風であったという。変化は、1994 年 10 月に突然始まった。当時のジュリアーニ市長の NY 市クリーン政策によって、路上屋台は一掃され、ベンダー（路上商人）は商業ビルに入るよう強制された。

#### 5 ムリッド・ネットワークのノード

ムリッド教団の全米本部（Murid Islamic Community in America, Inc, 略称：MICA）は、ハーレム 137 丁目に 1988 年に創建された。独立したビルは、事務所、男女別モスク、簡易宿泊施設も備え、地上 4 階、地下 1 階の重厚な建物である。この建物は、ムリッドの総本山 Touba のカリフの指示で、信者の寄付と本山からの支援によって完成した 9・11 事件以降、イスラム組織への警戒感が強まっているから、HP で組織について外部者向けに説明したり、学校など信徒以外の訪問を受け入れたりして、アメリカ社会に対して情報公開を心がけている様子が伺えた。MICA 事務所に常駐しているメンバーは、イマム（僧侶、2F に居住）、秘書（通勤）、管理人（4F に家族で居住）、炊事・雑用係（管理人の妻）の 4 名で、午後の祈りの時間帯になるとタクシー運転手などが集まってくる。

MICA は、セネガルの聖地トゥーバを中心とする世界的なムリッド・ネットワークのアメリカにおけるノードとしてよく機能している様子が参与観察から伺えた。

### III NY ムリッドの生活世界と社会的ネットワーク

インタビュー結果から、ニューヨークへの移動の動機として、殆どのインフォーマントが、「家族のための出稼ぎ」と回答した。ビザの取得方法は商用、会議出席、宗教活動などで、5 年のビザを延長、あるいは一度帰国して再取得するなどしている。滞在期間は 10 年～20 年以上など長期滞在者が多い。これは、一度セネガルに帰国してしまうと再入国が困難なため、何とか永住権（グリーンカード）を取得できるまで滞在し続ける傾向があるためだと考えられる。近年、永住権取得のハードルが上がってきているとは言っても、欧州に比べるとアメリカは滞在しやすいとのことであった。

店員など僅かなアルバイト的な労働による収入から家族への送金は毎週行っている。彼らは単身でニューヨークに渡り、同郷の知人等と共に住居をシェアし、長年働くが、一生をニューヨークで終わるつもりはなく、いずれセネガルに帰るつもりらしい。そのため家族を通じ故郷に投資し、自宅やアパートを建てている。いずれは帰国してゆったりとした老後を見ている。

今回の調査から、リトル・セネガルで中心的存在となっているのがムリッドであることが明らかになった。また、ムリッド教団の全米本部（MICA）が、合衆国内に多くのブランチを抱え、活発な活動を展開していることも明らかとなった。今後の研究は、インタビューの中で何度となく出てきたムリッドの教義（相互扶助の考え方、労働観）に関する検討から、ムリッド教団が若者を取り込みながら拡大する理由について考えたい。

#### 《参考文献》

- Babou, C., A. (2002) "Brotherhood, Solidarity, Education, and Migration—the Role of the Dahiras among the Murid Muslims Community of New York," *African Affaires* 101:151-170.  
— (2007) *Fighting the Greater Jihad : Amadu Bamba and the Founding of the Muridiyya of Senegal, 1953-1913*, (Ohio University Press)